

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 弘前大学教職大学院
コラボ研修プログラム	事業名：NITS・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業
支援事業報告書	研修等名：【NITS・弘前大学教職大学院コラボ研修】公開セミナー 開催日時：第1回 令和6年1月20日(土) 13時00分～14時40分 第2回 令和6年1月20日(土) 15時00分～16時40分 第3回 令和6年2月3日(土) 13時00分～14時40分 第4回 令和6年2月3日(土) 15時00分～16時40分 開催場所：オンライン (Zoom) 参加人数 (総数) と参加者の属性：教員、教職大学院生 第1・2回 37人、第3・4回 51人

#### 内容：

学び続ける教員を支えるために、最新の教育課題を扱うオンラインのセミナー。

#### 第1回「学校のルールをどうつくるか ―生徒との対話と改訂生徒指導提要―」

講師：山本 晃史 氏 (認定 NPO 法人カタリバ)

新しい生徒指導提要は、「こども基本法」(2023年4月施行)に触れながら、校則の見直しにあたって、子どもたちの意見を聞いたり児童会・生徒会で議論したりすることの教育的意義について述べています。全国の学校で、子どもたちや先生と一緒に「ルールメイキング」のプロジェクトを進めている NPO 法人カタリバの山本晃史さんから、そのプロセスと意義についてお話しいただきました。

#### 第2回「デジタル社会におけるさまざまなリテラシー ―予測困難な時代を生きるチカラ―」

講師：森本 洋介 氏 (弘前大学教育学部准教授)

VUCA 時代とも呼ばれる、すぐ先の未来ですら起こることが予測困難な時代に私たちは生きています。その原因のひとつがデジタルメディアや AI (人工知能) といったテクノロジーの急速な発達です。メディアからもたらされる情報や、テクノロジーによる社会の変化を読み解くための能力であるさまざまな現代のリテラシーについて、メディア・リテラシー教育を専門とする弘前大学教育学部の森本准教授からお話しいただきました。

#### 第3回「子どもの回復力を育てる ―学校で活かすストレス・マネジメント―」

講師：藤江 玲子 氏 (弘前大学教職大学院准教授)

人は、生きていく中でさまざまなライフイベントに出会います。また、時に対人関係上の問題や家族の問題、社会経済的問題などを抱えます。そのような中で、ストレスと上手につきあい、回復する力を育むことは、子どもの発達を支えるとともに、不登校・いじめ・暴力・自殺といった課題を予防するためのプロアクティブな生徒指導としても重要と言えます。認知行動療法に基づくストレス・マネジメントを学校で活用する方法について、藤江准教授からお話しいただきました。

#### 第4回「ヤングケアラーにどう対応するか ―これからの福祉との連携―」

講師：最上 和幸 氏 (青森明の星短期大学教授)

教師として子どもたちと向き合う中で、目の前の子どもたちの後ろに困難な家庭の状況が垣間見える時があると思います。でも、家庭のことにどう対応したらいいのか、悩んでいる先生も少なくないでしょう。福祉行政に長く携わり、弘前大学「子どもの貧困をめぐる協働プロジェクト」でヤングケアラー問題などに取り組まれてきた最上教授に、連携を図る上でポイントとなる福祉の視点について伺いました。



#### 成果：

##### 【事後アンケート】

講座の充実度を尋ねた 5 段階の設問の平均は、第1回は 4.65、第2回は 4.31、第3回は 4.68、第4回

は 4.80 と、いずれも高評価であった。各回の自由記述から抜粋したものを下に示す。

### 第 1 回「学校のルールをどうつくるか 一生徒との対話と改訂生徒指導提要一」

- ・ 教員歴 6 年の若輩者です。ベテランの先生方の中で、若手の男性教員ということもあり生徒指導の前線に立たされることが多く、疑問に思うことが多々あります。古くからの慣習により、理不尽な校則に関しても厳しく指導できて一人前という風土があり、違和感を声に出すことができずにいました。今回のセミナーでこの違和感は間違いではないと勇気づけられるとともに、生徒も同じく声を上げづらいのだなとわかりました。本日は貴重なお話をありがとうございました。変えていく契機にしたいと思います。
- ・ 小学校でもルールメイキングが始まっているということに背中を押された気がしました。参加された先生方のチャットにあったようにルールを守る意識が強いあまりに変えるという意識を子どもがもちにくい側面もあるので、学級単位で決められることを決めていく経験を積み重ねていくことで少しずつ子どもの意識が変わっていくように思いました。

### 第 2 回「デジタル社会におけるさまざまなリテラシー 一予測困難な時代を生きるチカラ一」

- ・ デジタルとアナログをバランスよく使い分けるといふ点、AI と競争するのではなく人間にしかできないことを追求していくという点、とても印象に残りました。新たな〇〇力などが出てくると、どうしても新しいものが善でこれまでのものが悪のように思われがちですが、互いの良いところを取り合いつつ、子供にとって一番いいことは何かを軸に考えていくことが大切なのではないかと考えました。
- ・ リテラシーという言葉の整理という観点は、これまでモヤモヤしていたことの理解につながる内容で目から鱗でした。教育実践の内容を精査することにつながる大切な内容でした。

### 第 3 回「子どもの回復力を育てる 一学校で活かすストレス・マネジメント一」

- ・ アサーショントレーニングについて、生徒に行う前に教員の研修でやってみようと思いました。
- ・ 養護教諭として子どもと接する中で、子どもが良い方向に向かうために、思考を変えるのは難しいなと感じています。しかし、子ども自身が感情に気づくように支援をしたり、アイメッセージでこちらの思いを伝えたり、様々なアプローチができるのかなと思いました。たくさんの事例も紹介していただき、とても勉強になりました。ありがとうございました。

### 第 4 回「ヤングケアラーにどう対応するか 一これからの福祉との連携一」

- ・ ヤングケアラーに対する認識を校内で共有したいと改めて感じています。セミナーは大変参考となりました。論点はズレますが、SSW の配置がまだまだ足りないと感じています。学校のこと、生徒のこと、保護者のこと等を知っている教員経験者が SSW となる仕組みや現職教員が社会福祉士の資格取得をできるような支援があればと考えています。
- ・ 増加傾向にある「ヤングケアラー」の問題を深く知るとともに、対応の難しさを改めて感じた。最上先生の講演は、具体的に青森県のヤングケアラーの現状について話していただき、とても参考になった。本校にもヤングケアラーと思われる生徒がいるが、家族のことを大切に思っており、対応が難しいと感じていた。また、我々教員が家庭のことにどれだけ首を突っ込んでいいのかも常に悩む点である。今回は福祉の視点からの話も多く、教員の視点からはまた違った見方をすることができて大変勉強になった。関係機関との連携をしっかりとりながら対応していくことが重要であると改めて感じた。

アイデアや工夫したこと：※3～5つ程度の箇条書きしてください。

- ① 教育現場が抱える悩みを意識し、最新の教育課題をテーマとして選択すること。
- ② それぞれのテーマについて、青森県という地域性を十分踏まえた内容とすること。
- ③ 一方的な講義だけでなく、質疑応答の時間を十分とることで、双方向性のある運営とすること。

<写真・図など>

※オンラインで、安定した通信環境を保つため、参加者の画像はオフにしていた。

